繁殖から肥育までの一貫経営に関する技術

松山義弘・紙屋　茂・花田博之

研修地　尾崎農場
　　宮崎市大字大瀬町3122
　　宮崎大学農学部附属農場住吉牧場
　　宮崎市大字島之内10100－1
日　程　1995年3月7日～3月8日

入来牧場では年間約140頭の子牛を生産し，一部は市場出荷や自家用素牛として育成している。また，肥育素牛の一部は離島を中心に価格の安い放牧生産子牛を導入し，運営の節減にも勤めている。そこで今回は一貫経営技術の向上を目的に，繁殖及び肥育技術水準の高い肉用牛農家で研修した。

尾崎農場は肥育を主体にしながら繁殖牛も飼育し，子牛は肥育素牛にむけコスト削減をはかっている。また，肥育牛では枝肉の上物率が80％以上である。健康で安全な牛肉生産をめざし，独自の自家配合肥料で飼育し，健康維持および食欲増進につとめていた。更に，子牛の発育向上や下痢防止にはラクリスＳを飼料に添加し給与していた。また牛にストレスを与えないために，それぞれの部屋の環境を揃えていた。特に，充分な休息地をもうけ，牛どうしの相性にも心がけていた。素牛購入にあたっては価格の高い牛を導入しないで，安価な個体導入に努力していた。今後は素牛コストを更に抑えるために繁殖牛を増やし，生産から肥育まで一貫経営をめざそうとしていた。一般の畜産農家では堆肥処理に困り，公害を心配している状況にあるが，本農場では敷料にバークを使い，臭いの無い堆肥をつくり販売していた。

これらの諸技術の中から牧場で取り入れられる事を検討したい。特に経費節減の為に単味配合とラクリスＳの利用等を取り入れる必要があると思われた。

住吉牧場は総面積が50.4haで，和牛94頭及び乳牛48頭を飼育していた。草地面積は9.64haで，教官２名，技官６名および事務官２名で，大型機械等を使い農場を管理していた。牧場では機械格納庫が充分な面積で確保され，全部の機械がよく整備されるため，機械の耐用年数が長くなっていた。入来牧場では充分な機械の格納庫がなく，高価な大型機械が屋外保管状態になっている。入来牧場での機械の格納庫の必要性を痛感した。